はじめに

今般、『新・小堀遠州の書状』を刊行するにあたり、その原点ともいえる、父・紅心宗慶による、第一巻並びに第二巻にもう一度目を通したが、改めて感ずることは、小堀遠州という人物の持つ、万能な魅力である。伏見奉行を代表とする幕府行政官としての顔、作事奉行の数々の業績、加えて茶人として、自らの茶会、将軍を始めとする貴人高位の人の茶会のプロデュース、さらには、茶道具に対しての指導並びに鑑定など、よくこれだけ多くの行事をこなしてきたものであると驚嘆するばかりである。と同時にその血統を継ぐ私自身はどうであるかと考えると、まだまだ遠州には遠く及ばない現実を知らされる。というのは、第二巻が発刊されてから、すでに二〇年もの歳月を要してしまったという反省の意味も含んでいる。

昨今、ありがたいことに小堀遠州の研究をされる方が多くなり、既刊の遠州文献に関しても新たな視点を加える必要性も出てきている。そういう意味では本書は、父・紅心が最晩年まで取り組んだ消息の読み下し、解説を基軸として、その後に判明した事実による見解も入れている。遠州の研究にすべてを注入した父の七回忌の年に出版できたことは、何かの因縁であると思わざるをえない。

さて、遠州の書状における花押の違いについて、宛先の人物の立場や、遠州の年齢などによるものかどうか、長年にわたり多くの方々の意見が様々あり、今の所まで解明されてはいない。しかしながら、私は、そのことについてはさほどの意味を感じていない。私見ではあるが、あの忙しい日を過ごした遠州が書く膨大な手紙の数を考えると極めて速筆でないと量をこなせないのである。したがってさらっと花押を書することもごく自然の流れであったと想像している。ともあれ、手紙は他人にはみせない部分が多い。遠州の心情をその文章や行間から楽しみ読んでいただきたいと思う。

おわりに、遠州の年譜をはじめ父と私の研究に史料を提供し、助言をいただいた多くの方々に感謝申し上げる。

遠州茶道宗家十三世　不傳庵　小堀 宗 実

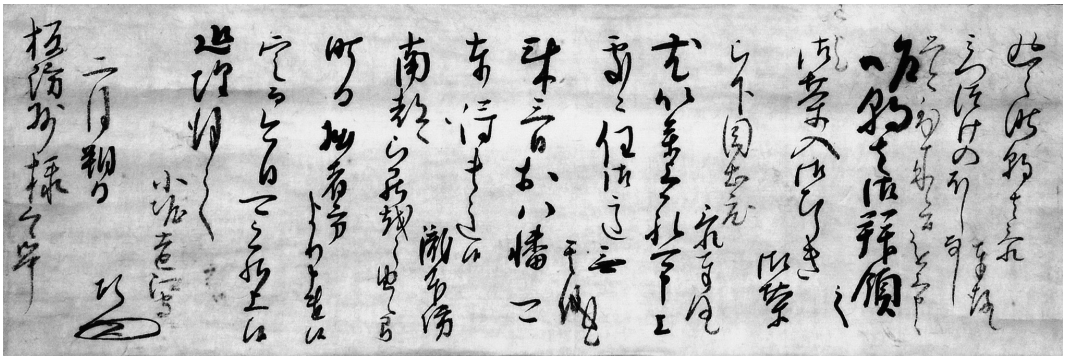
もくじ――新・小堀遠州の書状――

はじめに　i
凡　例　2

1 東海寺和尚宛　**歳暮歌入りの文**　3
2 春雨庵宛　**御詠三首御礼**　8
3 竜光院宛　**大坂の陣出陣先より**　14
4 江月和尚宛　**若菜歌入りの文**　20
5 板倉周防守宛　**茶の湯招待への御礼**　26
6 木下長嘯子宛　**松の葉に歌入りの文**　30
7 朽木民部宛　**茶道具鑑定**　33
8 朽木民部少輔宛　**百合の御礼**　39
9 細川忠利宛　**粗餐への招待**　42
10 岡将監宛　**大膳の事**　46
11 岡将監宛　**井戸茶碗の事**　47
12 池田光政宛　**御指図報告の返書**　53
13 沢宗也宛　**椿の接ぎ木依頼（椿の絵入り）**　56

14 佐川田喜六宛　**将軍御見送りの事**　59
15 岡本言当宛　**寿ぎの歌への返歌**　63
16 竹腰正信宛　**椿の御礼**　66
17 伊達忠宗宛　**洪水のお見舞いと利休物相茶入の事**　70
18 清水道閑宛　**一月二十八日付**　76
19 清水道閑宛　**利休物相茶入盆の事**　84
20 松花堂昭乗宛　**三幅対の事**　89
21 竹腰正信宛　**掛物表具之義見事につき**　92
22 竹腰正信宛　**掛物の表具出来の事**　99
23 阿部備中守宛　**ろくとうと干し魚の御礼**　104
24 阿部豊後守宛　**こんにゃく答(到)来御礼**　110
25 竹腰正信宛　**御掛物表具の事**　115
26 松花堂昭乗宛　**生野茶入の事**　118
27 牧野佐渡守宛　**鶴の羽箒の事**　122
28 **遠州・織部往復書状**　128
29 金地院崇伝宛　**金地院作事の事**　134
30 澤庵宗彭宛　**流配餞別の文**　141
31 水野兵九郎宛　**在中庵茶入添文**　148

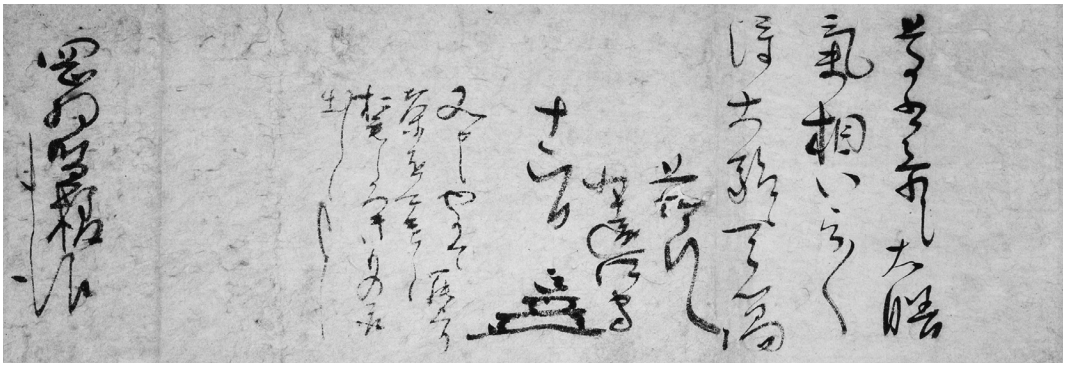
関係人物生没年　152



5 板倉周防守宛 茶の湯招待への御礼

〔解読文〕

追申候昨朝は忝
奉存候
ミつつけのほしなし
只今致来候間進上申候
昨朝は御拝領之
已上
御茶入御ひらき
御茶
被下目出度忝奉存候
尤以参上御礼可申上
処ニ任御意無
其儀候
来三日於八幡可
奉得貴意候
瀧本坊
南都へ被罷越之由候間
昨日拙者方
より申遣候
定而今日可被罷上候
恐惶謹言
小堀遠江守
二月朔日　政（花押）
板防州様　人々御中



禅文化歴史博物館所蔵

10 岡将監宛 大膳の事

〔解読文〕

尊書奉候大膳
気相いよ〳〵
得大験候可御心易
恐惶謹言
小遠江守
十六日　正（花押）

又申候やかて罷上り
茶を可進之候
おもしろきもの取
出し候かしく

岡将監様
貴報

〔読み下し文〕

〈10〉

尊書奉候

大膳　気相いよ〳〵大験を得候

御心易べく

恐惶謹言

小遠江守

十六日　正一（花押）

又申し候　やがて罷上り

茶をまいらすべく候

おもしろきもの

取出し候　かしく

岡田将監様　貴報

〈11〉

昨日は本望に存じ候

甚三郎殿井戸茶碗

先年も一覧申し候

井戸の内にては和尚と存じ奉り候

昨日今日と暮れ行くままに

早　楽しみの身繕い

殊勝存ずべく候

いまだ各　またまた

年の寄らぬも

めでたく存じ候

恐惶謹言

小堀遠江守

閏　二十二日　正一（花押）

岡田将監様　貴報

〈追伸〉甚三郎殿へ御茶碗の事

別してから物

しかるべくように頼みて候て

ゆるくとなさるべく

相待ち申し候

以上

〔解説〕

江戸時代初頭、小堀遠州が活躍し、書状を交わした人々のうちで、「岡田将監」は可能性として二人いる。

一人は岡田善同（よしあつ）で、永禄元年（一五五八）生まれ、寛永八年（一六三一）五月二十九日に七十四歳で没した。遠州より二十一歳上で、善同が没した年は、遠州は五十三歳であった。

善同は、幼い時から織田信長に仕え、その後、前田利家のもとに寓居（ぐうきょ）、加藤主計頭清正に属して加藤を称し、豊臣秀吉に仕えて姓を岡田に戻している。

慶長五年（一六〇〇）四十三歳の善同は徳川家康に属し、翌年の六月九日には美濃国にて采地五千石を領し、後には美濃国の奉行を勤め、近江・伊勢・筑後等の郡代をも兼ねる。その後、尾張国名古屋城普請のとき木曾山の材木の伐事を奉行し、大坂両度の役には陣道具の奉行を勤める。その後には伊勢・山田奉行を兼ねる。

寛永六年七十二歳で伊勢大神宮造営を申し付けられ、その年の九月十三日には従五位下伊勢守に叙任する。したがってこれまでは、「岡田将監」とは岡田善同のことであった。遠州は五十一歳であった。

寛永八年正月二十四日、采地を改めて美濃国大野郡のうちに移されて、八十石を加増され、すべてで五千八十石を知行することになる。同年五月、病を治すために暇をとり、京都に赴いて、同月二十九日に没する。

もう一人の将監は、善同の嫡男・義政で、慶長十年（一六〇五）の生まれ。遠州より二十六歳下である。

慶長十四年、五歳のときに、駿府において初めて家康に拝謁する。寛永八年二十七歳の正月二十四日、父・善同が老年に及ぶまで職事に怠りなく、領地をよく治めたことを賞せられ、父をたすけてその職を見習うようにとの仰せをこうむり、美濃国の中において、采地千石を下賜される。同年五月二十九日、父が亡くなると、八月に遺跡を継ぎ、五千八十石を知行し、さきに与えられた采地は収公され、父